

ガラテヤ 5・1,13-18

ルカ 9・51-62

今日の福音は、エルサレムに向けて最後の道程を歩み始めようとしておられるイエスが、弟子たちに語られたみことばを伝えています。イエスにとってこのエルサレムへの道が何を意味していたかは、先週の福音で私たちが聞いたとおりです。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」。イエスはエルサレムで待ち受けていることの全てを、父なる神のご自分に対するみ旨として受け止め、エルサレムへの最後の道に旅立とうとしておられるのです。今日の福音は、イエスがなされたみわざと、イエスが語られたみことばを、言わば、外側から記述してきたこれまでの語り方から一転して、イエスの生涯を決することになった、エルサレムへのこの旅立ちに当たっての、イエスの内面の世界へと私たちを直に導こうとしているかのようなようです。今日の福音の冒頭の一節は、荘重な響きをもって語られています。「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」。

しかし、イエスの内面を直接語るこのことばは、福音書の記者がそこから私たちに読み取らせようとしている、もう一つの大切なメッセージを含むことばでもあります。先週の福音の箇所と今日の福音の箇所の間には、イエスの変容の場面が語られています。そこでは、変容の眩しい光の中にモーセとエリアが現れて、イエスとともに、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話し合っていたと語られています。

今日の福音の最初のことばに戻ってみると、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと・・・」と語りはじめています。福音書記者は、意図的に注意深くこれらのことばを選んで語っているのです。十字架につけられて死に、三日目に復活されるイエスは、ルカ福音書に直接続く使徒たちの宣教において、最終的に御父のもとに昇天されます。けれども、聖書全体を通して天に上げられたのはイエスが最初ではありません。火の馬の牽く火の車に乗って炎の旋風の中を天に上げられたエリアの物語は、弟子たちにとってもなじみ深いものだったはずで、エルサレムを目指して進むイエスの一行を迎え入れようとしないうサマリアの人々に対して、変容の場面に立ち会ったヤコブとヨハネが「お望みでしたら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言っているのも、エリヤの物語を思い起こさせます。エリヤは自分を捕らえようとしてやって来た人々を炎をもって焼き滅ぼしたのでした。これらの旧約のエリヤ物語を背景にルカ福

音書がここでも強調するメッセージは、イエスは決してエリヤのように天に上げられたのではないということです。十字架なしにはイエスにとっても、そのみ跡に従う者たちにとっても、天に上げられる道はないということです。それが、十字架の道を歩まれた主イエスが、そのみ跡に従う者たちに悟ってもらいたいと思っておられることであるということです。このことは、先週の福音においても語られていたことです。エルサレムでご自分を待ち受けている受難の死を予告されたあとで、イエスが弟子たちに告げられたみことばを私たちは聞きました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。

エルサレムへの最後の旅立ちに当たってのイエスの決意を語る今日の福音において、そのイエスのみ跡に従おうとする者たちへの招きのことばはいよいよ切迫した調子を帯びてきます。「あなたがお出でになるところなら、どこへでも従って参ります」と言った人に対してイエスは、「人の子には枕するところもない」と応えておられます。イエスのエルサレムに向かう旅路は、サマリアの人々に宿を拒否されることから始まっています。旅のはじめに当たってのこの出来事は、エルサレムに向かうイエスの運命を象徴しているかのようです。十字架の前夜、弟子たちと最後の晚餐をともにされたイエスは弟子たちを伴ってゲッセマニの園で、父なる神のみ旨に従い通すために祈り続けられ、そこで捕らえられて、その夜のうちに、大祭司のもとに引き立てられ、更に、ピラトの裁判を受けるために、引き渡されます。そして、あの十字架の上で最後の息を引き取られるのです。御父のみ旨として、ただただ人々の救いのために生きられ、その生涯を貫き通すために、十字架の死をも甘んじて御父にみ旨として受け止められたイエスには自分の安眠のための「枕するところ」はこの地上にはないのです。そのようなわたしの行くところに、あなたはついてくる覚悟ができているかと、あの人にイエスは問うているのです。

イエスの十字架の死によって、その先に開かれた復活のいのち、天に至る道を見出すためには、イエスに従って十字架の道を歩むことが求められます。けれども十字架の道を進まれるイエスの「わたしに従いなさい」との呼びかけは、今日の第二朗読のガラテヤの教会への手紙の中でパウロが述べているように、決して、私たちが奴隷のくびきにつなぐ掟なのではありません。イエスご自身、あのゲッセマニの園で父なる神のみ旨としての十字架の死を前に、血の汗を滴らせるほどの苦悩の中から祈りを捧げられたことを私たちは知っています。けれども、それら全ての苦しみを、イエスは、私たちがミサの聖変化の時に聴いているように「自ら進んで」引き受けられたのです。ミサのたびごとに、司祭は次のよう

に唱え続けています。「主イエスは進んで受難に向かう前に、パンを取り、感謝をささげ、割って弟子たちに与えて仰せになりました。皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしの体である。」私たちがご聖体をいただくのは、私たちのために進んで十字架の死に渡された主イエスの愛のいのちに生かされるためであり、私たちもまた、進んでイエスの呼びかけに応え、イエスの歩まれた十字架の道に従って歩む力をこの身にいただくためです。

イエスの十字架は単なる苦しみの表現ではありません。人々のために人々に代わって、進んで引き受けられた神の愛の苦しみの姿です。その十字架の道を歩み通されたイエスは、今日も私たちをそのみ跡に従うよう招かれています。なぜ親の葬儀までも差し置いて、愛する人への分かれの暇も与えられずに、イエスの呼びかけに従わねばならないのでしょうか。先週のイエスの招きのことばを思い出したらよいかもかもしれません。「わたしについて来たいと思うものは、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」とイエスは言われます。私たちの日々における十字架の道への招きは、私たちがそれに応えることによって初めて実現される、私たちにとっての十字架の道に従うチャンスなのです。イエスが切り開いてくださる十字架の道の彼方を目指すなら、どのような口実があっても、このチャンスを見失うべきではないとイエスは今日も私たちに呼びかけていてくださるのです。

ガラテヤの教会への手紙が呼びかけているように、私たちの心が本当に自由になって、私たちの日々の中で、その日その日、イエスのこの十字架の道への招きに応えることが出来るよう、聖霊の助けと導きを願いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高